HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	松枝, 大治; 星野, 祐子
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 16
Issue Date	2008-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49235
Type	book
File Information	MuseumNews_16.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

16 号

ISSN 1345-059X

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学総合博物館ニュース

水産科学館への歩み

2007年5月28日に北海道大学総合博物館水産科学館の総合博物館分館化記念セレモニーが原彰彦·水産科学研究院長、馬渡駿介·総合博物館館長、藤田正一·同前館長ほかのご臨席のもと北海道大学函館キャンパスで挙行された。函館キャンパスでは、折しも前日まで水産学部創基100周年記念式典が行われていたが、この日、分館の正面玄関には「総合博物館水産科学館」と記された真新しい看板が掲げられた。



総合博物館水産科学館·本館（北大函館キャンパス内）

水産科学館の前身である水産資料館は、北海道大学水産学部の創基50周年にあたる1957年に水産学部同窓会（以後、北水同窓会）が創基50周年記念事業として水産標本館の建設·寄附を決定し、1958年7月に水産博物館として北海道大学函館キャンパス内に開館された。1964年には、水産博物館という名称が博物館法上の博物館に該当しないなどの理由から、その名称を水産資料館と改められたが、この水産資料館が現在の水産科学館本館（延べ面積396.7㎡）にあたる。

北海道大学水産学部は、1907年に札幌農学校水産学科として発足して以来、北海道·樺太·千島列島·ベーリング海などの北方海域や河川に生息する生物·水産資源の調査を継続的に実施してきたが、この間に数多くの標本や資料を収集し、分類·整理して教育や研究に用いてきた。東北帝国大学農科大学水産学科や北海道帝国大学附属水産専門部時代には、1908年に小樽で開催された水産共進会や、1919年に札幌で開催された開道50周年記念共進会に出品された水産業関連の品々が本学に移管され、水産講堂の標本室にそれらが展示された。1935年に函館に移って函館高等水産学校となった際には、校舎正面玄関の二階に標本室と北洋漁業関係資料を集めた北洋室を設置し、両室の水産関係の資料はさらに整備されていった。しかし、1945年の終戦後に校舎は進駐軍の兵舎として接収され、標本室と北洋室の水産関係資料は当時函館市内谷地頭にあった旧津軽要塞司令部倉庫に移されたが、この間に数多くの標本·資料の破壊、紛失を余儀なくされた。校舎の返還後は、経済混乱や入学学生数の増加のため校舎が狭隘化し、両室が復元されない状況が続いた。この様な歴史を経て、これらの標本類を基礎として1958年に開館したのが水産資料館であった。

1982年の水産学部創基75周年には、北水同窓会が母体となった創基75周年記念事業後援会が、水産学部の歩みや歴史的資料を展示するための附属建物を建設·寄付することを決定し、同年10月に着工、翌1983年3月に竣工落成し、水産資料館別館（延べ面積332㎡）として開館した。さらに、1988年には、大洋漁業株式会社から1960年に寄贈された旧北洋水産研究館が改装され、水産資料館附属の水産生物標本館（延べ面積666㎡）として整備された。水産資料館本館·別館は主に標本·資料の展示·公開を行う施設であるのに対して、水産生物標本館は研究に供される生物の学術標本を所蔵し、保存·管理を行う施設として位置づけられた。



開館当時の水産資料館（1960年頃）

目　次

ページ 1： 水産科学館への歩み（矢部 衛）
ページ 2： 第44回企画展示
ページ 3： 第45回企画展示
ページ 4： 第46～48回企画展示
ページ 5： 第49～51回企画展示
ページ 6： 考古学部門の長期滞在研究員の紹介
ページ 7： 特任教授紹介
紀伊國屋書店札幌本店にて「北海道大学の昆虫」標本展を開催
北海道大学交響楽団チェンバロプロジェクト演奏会　vol. 1
ページ 8： ヒストリカル·カフェを開催
福井市自然史博物館「樺太·千島」展に出展
藤田正一 大学院獣医学研究科教授（前総合博物館長）に北海道新聞文化賞
ページ 9： ミュージアムショップの移転
平成19年4月から平成19年9月までにおこなわれたセミナー等·COEパラタクソノミスト講座
ページ10： 平成19年4月から平成19年10月までの主な出来事
入館者数（平成19年4月～平成19年9月）
お知らせ·寄附のお礼·お礼

Feb. 2008
ISSUE 16

北海道大学総合博物館　　2008年2月発行

北海道大学総合博物館が1999年4月に設置されると同時に、水産資料館は機能的には総合博物館の機構下に入り、総合博物館の教員1名が水産資料館に常駐し、水産資料館の管理運営や標本類の維持管理などの業務を行うことになった。そして、水産学部創基100周年にあたる2007年の4月に、水産資料館は水産学部から総合博物館へ正式に移管され、北海道大学総合博物館の初めての分館「水産科学館」として新たなスタートをきった。

水産科学館の本館は3つの標本展示室から構成されている。第一標本室には、世界の代表的な魚類約500種の標本が系統進化の順に配列・展示されており、その中には深海性で原始的なサメの仲間のラブカや体長1mを超えるアカマンボウなどのユニークな魚類が数多く含まれている。2002年には7個の水槽型の大型展示ケースを設置し、ヤツメウナギ類とサメ・エイ類の標本を標本瓶陳列形式から水族館を思わす水槽形式の展示に一新した。そのほか、世界的にも貴重な頭足類（イカ、タコ類）や海藻類などの生物標本類も陳列されて



水産科学館本館・第一標本室

いる。第二標本室には、江戸時代から明治初期まで本州と北海道を往復した弁財船（和商船）や明治期に全国各地で使用されていた和船など、日本の漁船の歴史を研究する上で貴重な資料である漁船模型をはじめ、網漁具模型、全国各地で使用されていた手作りの釣具など約2,500種6,000点が展示されている。第三標本室には、真珠、貝細工、鼈甲（べっこう）やサンゴなどの水産加工品や水産食品など、また水産増殖施設や水産食品工場の歴史を知ることができる模型、パネルなどが展示されている。これらの中でも鼈甲細工や貝細工は現在では入手がきわめて困難になった貴重な資料である。本館の裏側に続く水産科学



水産科学館別館・練習船の模型と関係資料

館別館には水産学部の100年の歩みを示す歴史的資料類や、水産学部の附属練習船おしょろ丸、北星丸、うしお丸、潜水艇くろしお号の模型や歴代の練習船の航海装備などが展示されている。また、エトピリカやラッコなどの北方系の海鳥や海産哺乳類の剥製・骨格標本類が展示されており、その中でも体長15mのニタリクジラの全骨格標本や、おしょろ丸が北洋で採集した巨大なトドの剥製標本は圧巻である。また、2007年の水産学部創基100周年記念事業により、この別館に各種オーディオ・ビデオ器機、プロジェクター、スクリーンなどが装備され、講演会、上映会、演奏会などを行うことのできる多目的ホール「100年スケアー」として活用されるようになった。

水産生物標本館は一般には公開されていないが、ここには世界の様々な水域から収集された膨大な魚類学術標本が所蔵されており、その標本数は新種記載の基準となったタイプ標本約800点を含む201,000点以上に及ぶ。これらの標本はHUMZ（北海道大学の魚類標本の機関コード）標本として今や国内外で高く評価されている世界屈指の魚類学術標本であるが、これには1970年代後半からコンピューターによる標本管理システムの構築に取り組んだ当時の水産学部水産動物学講座（現・海洋生物学講座魚類体系学領域）の尼岡邦夫名誉教授、仲谷一宏教授をはじめと



水産科学館別館・ニタリクジラの骨格標本

する歴代の研究スタッフの力に負うところが大きい。さらに水産生物標本館には、おしょろ丸をはじめとする本学練習船が過去50年間以上にわたり北洋海域で実施してきた約7,000調査点にのぼる海洋観測の際に採取したプランクトン標本や、日本の頭足類の分類学に草分けである佐々木望博士の研究で扱われたタイプ標本、甲殻類（エビ・カニ）などの貴重な学術標本が所蔵されている。水産生物標本館は、このように海洋生物の研究に欠くことのできない数多くの貴重な研究資料を所蔵管理しているが、近年に至り施設の著しい老朽化が危惧されている。

水産学部水産資料館は、このように水産科学に関する標本や資料の展示・公開と学術標本の管理・保存を50年間にわたり行ってきた。また2003年からは、夏期（5月から10月）の第三土曜日に、小中学生を対象として海洋生物と水産科学への興味・関心を深めることを目的とした水産資料館ミニレクチャーを実施してきた。水産資料館を継承した水産科学館は、今後も水産科学の教育研究の基盤となる学術標本・資料の保存・管理を行うと伴に、様々な大学公開事業を積極的に展開し、北海道大学の地域社会への窓口の一つとしての使命を担っていく。そのためにも、北海道大学総合博物館の分館として本館との連携をさらに深め、大学博物館として機能の一層の充実を図っていきたい。

矢部　衛
（総合博物館水産科学館長）

第44回企画展示
「悲劇の北大生宮澤弘幸の『青春を綴じたアルバム』展」

2007年2月22日は悲劇の北大生宮澤弘幸氏の60回忌でした。これを機に、北大総合博物館では彼が自ら題したアルバム、「青春を綴じたアルバム」より、多くの写真を複製し、彼がどのような学生だったのか、どのような大学生活を送っていたのか、優秀で、国際性豊かで、行動的な典型的な当時の北大生の姿を紹介し、彼に突如起こった悲劇が何であったのかを見て考えていただく企画としました。アルバムの写真は宮澤弘幸氏の妹、秋間美江子氏所蔵のアルバムより撮影させていただきました。

満鉄の懸賞論文に合格し、中国・満州への旅行に招待されるなど、将来を嘱望されていた北大生宮澤弘幸と、彼をはじめ、北大生を暖かい愛で包んでくれていた北大予科の英語教師ハロルド、ポーリン・レーン夫妻が大きな災難に見舞われたのは、日本がハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカに



宣戦布告した1941年12月8日のことでした。この日早朝、日米開戦の事実をニュースで知って、レーン夫妻の宿舎に、変わら

ぬ友情を誓いに来た宮澤弘幸は、レーン夫妻とともに軍機保護法違反（スパイ容疑）で逮捕されたのです。既にリンドバーグが立ち寄ったことで世界中に公知であった根室の飛行場の話を夫妻に語ったことが、スパイ活動だという理由でした。いわれの無い冤罪で3人は15ー12年の懲役刑を言い渡されたのでした。しかし、北大は彼らの嫌疑を晴らすための何の手立ても講じませんでした。レーン夫妻は1943年、刑の執行停止を受けて最後の引揚船でアメリカに渡り、宮澤弘幸は網走刑務所で非人道的な拷問の数々を受け、身体を壊します。戦後釈放されましたが、服役中に発病した結核がもとで1年4ヵ月後の昭和22年2月22日に亡くなってしまいました。戦後、再び日本にやってきたレーン夫妻はさっそく宮澤弘幸の遺族を訪ねましたが、遺族は花束を受け取ろうとはしませんでした。遺族は、レーン夫妻が特高警察にあることないことをしゃべったせいで、弘幸が罪に陥れられた、と間違った恨みを抱いてしまったためでした。スパイ事件は、極めて有能な青年の生涯をめちゃめちゃにしてしまったばかりか、宮澤一家とレーン夫妻との信頼と友情をずたずたに引き裂いてしまったのです。レーン夫妻は戦前と変わらず最後まで北大生を愛し、札幌の地に骨をうずめました。彼らの遺産はレーン奨学金として、長い間、貧しくても向学心のある北大生を助けてきました。今も、この基金はレーン賞として優秀な学生の顕彰に使われています。今回の展示は、宮澤弘幸の60回忌を機に、国や大学が、将来を嘱望されていた、優秀な若者を冤罪で犠牲にしてしまった歴史に学び、再び繰り返してはならないこのような過ちを風化させないために行われました。本展開催期間中の来館者は7,687人でした。新聞に関連記事が2回も取り上げられ、この事件の告発に尽力された上田弁護士から連絡があるなど、大きな反響がありました。今後、北大として、除籍の撤回など、宮澤弘幸氏の名誉回復が望まれます。本原稿の依頼を受けたその日、宮澤弘幸氏のただ一人の生存する家族、米国在住の秋間美江子氏からチョコレートのプレゼントが私宛に届きました。「私達のような悲しい人間を、もう作っちゃいけない」彼女の悲痛な叫びが耳に残ります。



藤田正一
（獣医学研究科教授／前総合博物館長）

第45回企画展示
「科学者のフィールド･スケッチ展 ー坂本直行を源流としてー」

平成18年秋に、北海道大学創起130周年記念企画展示「二十一世紀の武士道ー北大に通底する精神の系譜」が開催されました。それに引き続き、「北大学派の学風」の一つに挙げられる「フィールド･ワークの重視」という学風を示すために、平成19年5月19日（土）から6月24日（日）の日程で、第45回企画展「科学者のフィールド･スケッチ展　ー坂本直行を源流としてー」を開催しました。本展示では、北大出身の科学者が海外、国内の調査、旅行など、フィールド･ワークに際して現地で描いた絵･スケッチなどの作品を集めて展示しました。展示では、フィールド･スケッチ画家としても著名な坂本直行を中心に据え、故人や現役の科学者が描いたスケッチ･絵画約50点に加え、関連の画材や画集等を多数集めて展示しました。本展示には、遠く沖縄やノルウェー在住の研究者からの出品もありました。

科学とスケッチとは、どんな関係があるのでしょうか。かつて、東京大学の祖とされる「開成所」では、数学、科学、地理学と共に画業の講義があり、明治初期には、画業は芸術ではなく科学技術の分野に属し、その付属技術とされていました。またごく最近では、英国の有名な科学誌“Nature”に、科学と絵との関係を紹介する「ペンはカメラよりも強し」という記事も出ています。

デジタルカメラを使えば高解像度の画像が得られ、加工も自由自在にできるのに、なぜ科学に携わる人が時代遅れと思われるような手書きのスケッチのような手法に頼る必要があるのでしょうか。それは、正確にスケッチするという行為ほど、描き手が対象物を鋭く観察し、見る人に伝達する視覚的言語が他には無いからだ、とこの記事は述べています。



そんな科学者のスケッチの例として、本企画展示では坂本直行を源流とした北大出身の科学者が描いた作品類を紹介し、そこに科学者の眼と心を感じ取って頂くことを狙いとしました。

展示期間はわずか一ヶ月余りと短いものでしたが、総入館者数は8,155人に達し、マスコミにも紹介されて大変好評でした。



本企画展における出品者の方々は以下のとおりです。

坂本　直行（故人）
［農学部･昭和2年卒／北大山岳部OB］
黒岩　大助（故人）
［北大名誉教授／低温科学研究所］
八木　健三
［北大名誉教授／理学部地質学鉱物学科］
橋本　誠二（故人）
［北大名誉教授／理学部･地鉱第10期］
木崎　甲子郎
［琉球大学名誉教授／理学部･地鉱第20期］
八鍬　利郎
［北大名誉教授／農学部･昭和28年修卒］
樋口　敬二
［名古屋大学名誉教授／理学部･物理第21期］
太田　昌秀
［ノルウェー極地研究所嘱託上級研究員／理学部･地鉱第27期］
小野　有五
［北大地球環境科学研究院教授］

松枝大治
（研究部長･教授／鉱物学･鉱床学）

第46回企画展示
『昆虫記』刊行100年記念 日仏共同企画 「ファーブルにまなぶ」
第47回企画展示
「北大の昆虫学」

平成19年7月1日から9月17日まで、第46回企画展示・『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展を開催しました。同時に第47回企画展示として「北大の昆虫学」を開催しました。入館者数は40,989人に上り、夏に開かれた企画展としては入館者最多の記録となりました。ボランティアの協力で入館者から1,625,120円におよぶ募金が集まりました。また北海道新聞社からは開催にあたり3,000,000円のご寄付をいただきました。関連講演会・シンポジウムを8回開催し、札幌市円山動物園と丸瀬布昆虫生態館ではサテライト展示が開かれました。図録は大人向け（152ページ）と子供向け（20ページ）の2種類を作成し販売しました。エルムプロジェクト、萬工房などの協力により20種類に及ぶファーブルグッズが作成され、これらはミュージアムショップで販売され好評を得ました。テレビ報道3回、新聞報道16回、ラジオや雑誌などにも多く取り上げられ、「ファーブルにまなぶ」展の盛況ぶりが報道されました。キリンビバレッジの「生茶」に広告が入ったこともはじめての試みでした。「ファーブルにまなぶ」展は、北大で開催された後、国立科学博物館（東京）、北九州市立いのちのたび博物館（八幡）、滋賀県立琵琶湖博物館（彦根）、兵庫県立人と自然の博物館（三田）、フランス国立自然史博物館（パリ）を巡回します。

【関連講演会・シンポジウム】

（1）オープニングレクチャー

2007年6月30日（土）北海道大学総合博物館 知の交流コーナー

●コンタ地方の荒れ地の研究所
—ジャン・アンリ・ファーブルのアルマス—
アンヌ・マリー・スレザック（元ファーブル・アルマス博物館館長）

●坂上昭一とホクダイコハナバチ
—ファーブルのコハナバチ研究をこえて—



戸田正憲（北海道大学低温科学研究所教授）

●「ファーブルにまなぶ」展のみどころ
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）

（2）リュカ・バリトー講演会

2007年7月7日（土）北海道大学総合博物館 知の交流コーナー

●ファーブル
リュカ・バリトー（Lucas Baliteau）（ジャン＝アンリ・ファーブル生家・博物館 野外活動指導員／フランス・サンレオン・ファーブル友の会会員）
共催：札幌日仏協会・アリアンス・フランセーズ札幌

（3）第22回 サイエンス・カフェ札幌

2007年7月21日（土）紀伊国屋書店札幌本店 正面入口

●100年目の昆虫記
～ファーブルと訪ねる虫たちの世界～
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）

（4）「ファーブルにまなぶ」講演会

2007年8月11日（土）道新ホール

●我が家の庭の昆虫
木野田君公（札幌市 坑井データサービス代表）

●ぼくがファーブルにまなんだこと



日高敏隆（京都大学名誉教授）

（5）「ファーブルにまなぶ」講演会

2007年9月2日（日） 北海道大学理学部大講堂

●虫コブを作るアブラムシの驚異
秋元信一（北海道大学農学研究科教授）

●ハリナシミツバチの世界
—閉ざされた巣内での産卵行動の不思議—
山根爽一（茨城大学教育学部教授）

●本能はどうせつめいできるか
—ファーブルの「反進化論」の彼方
遠藤彰（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）

（6）シニアサマーカレッジ

2007年8月30日（木）北海道大学総合博物館

●昆虫とファーブルにまなぶこと・ファーブル展及び総合博物館の体験
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）

（7）パラタクソノミスト養成講座

2007年7月31日−8月1日 旭川市科学館サイパル

●昆虫パラタクソノミスト講座Jr. in旭川（初級）
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）、南尚貴（旭川市科学館サイパル）、澤田義弘（大阪府箕面公園昆虫館）

2007年8月18日−19日 北海道開拓記念館

●昆虫パラタクソノミスト講座Jr. in野幌（初級）
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）、堀繁久（北海道開拓記念館）、澤田義弘（大阪府箕面公園昆虫館）

（8）平成遠友夜学校

2007年6月5日

●「ファーブルにまなぶ」展の紹介
大原昌宏（北海道大学総合博物館准教授）

大原昌宏
（研究部准教授／昆虫学）

第48回企画展示
「レイチェル・カーソン 生誕100年記念パネル展」

上記「ファーブルにまなぶ」展と同じく平成19年7月1日から9月17日まで、3階展示室にて第48回企画展示「レイチェル・カーソン生誕100年記念パネル展」を開催しました。見学者は約5,500人、そのうちの約3割が中学生以下の子供たちでした。全体の順路における展示室の位置の関係もあり、期間中の入館者全体に占める割合は十数%と決して多いとは言えない見学者数ではありましたが、展示室備え付けのノートへの記帳者は約1,000名、会場で子供たちが描いた「レイチェルへの絵手紙」は500枚以上と、見学者の反響が非常に大きな展示でした。なお、ニュース15号でご案内した展示内容の他、本学の全学教育科目（一般教育演習）として1学期に開講された「エコトキシコロジー —人と動物の共生を考える—」（担当教員：獣医学研究科教授 藤田正一）受講学生による、半年間の学習をふまえて「今日レイチェルが生きていたら自然保護のために何をしていたか」を念頭に製作した展示パネル21点が7月28日に追加され、さらに関心を呼びました。



この展示と関連し、北大サステイナビリティ・ガバナンス・プロジェクト主催の公開講座が、当館1階「知の交流」コーナーにて2回にわたり開催され、それぞれ約100名の市民が参加しました（8月5日：NPOレイチェル・カーソン日本協会理事長 上遠恵子氏「農薬による汚染の問題—生命の言葉で考える環境の世紀—」、9月5日：同協会専務理事 原強氏「くらしの中の化学物質 —廃棄物問題を中心として—」）。また、期間中の毎週日曜日に館内において映画「センス・オブ・ワンダー」の無料上映会を開催し、延べ216名が鑑賞し、151通の感想が寄せられました。



阿部剛史（研究部助教／海藻分類学）

第49回企画展示
「湯川秀樹・朝永振一郎 生誕百年記念展 −ノーベル賞への道のり−」

総合博物館の第49回企画展示として、9月21日から11月4日の日程で「湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念展 −ノーベル賞への道のり−」を3階企画展示室で開催しました。

湯川博士と朝永博士は、20世紀の物理学の発展を担った物理学者で、大正から昭和にかけての約9年間、旧制第三高校から、京都大学、京都大学卒業直後の研究生活までを共に過ごした学友であり、また良きライバルでした。湯川博士は、“核力の理論に基づく中間子の予言”で日本最初のノーベル賞、朝永博士は“素粒子物理学を切り開く量子電気力学の構築”で日本2番目のノーベル賞の栄誉に輝きました。



この偉大な業績をたたえると共に、平成19年が二人の生誕百年でもあることから、それを記念した全国展開の巡回展が企画されました。本展示は、全国の主だった素粒子物理学関係研究者の所属大学が受け手となり、広く一般市民・学生を対象とした普及啓蒙を目的とした展示となっています。国立科学博物館を起点として、筑波大学、京都大学、大阪大学、広島大学、宮崎大学と続いた両博士の生誕百年展が、全国巡回展示の一環として装いを新たに北海道大学でも開催されました。展示は、単に両博士の研究内容や業績の紹介にとどまらず、二人の対照的な人間性と歩みにも光を当てた展示となりました。特に、その若き日々、そして新たな道を切り拓いた研究の道のりとノーベル賞受賞後の生き方などについて紹介しました。さらに、北海道大学と二人の関係を紹介する意味で、二人を旧三高で教え大きな影響を与えた堀健夫博士（元北海道大学理学部教授）および湯川博士と親密な交流のあった雪の研究者中谷宇吉郎博士（同）についての紹介展示も併せて行いました。

北大における本展示は、主催が総合博物館、理学研究院、科学技術コミュニケータ養成ユニット（CoSTEP）、共催団体には日本物理学会北海道支部と北海道新聞が加わりました。展示期間中に、合わせて4回にわたる関連土曜市民セミナー（石川健三、田中 一、杉山滋郎、鈴木久雄）を開き、各回多数の一般市民、学生等の出席者があり、好評を博しました。展示期間中の見学者総数は合計15,156人に達し、特に最終日の11月4日（日）は1,814人/日を数え、総合博物館開館以来の最高入館者数を記録しました。



なお本巡回展は、北大の後はさらに新潟大、金沢大で引き続き開催されることになっています。

北海道大学「湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念展実行委員会」メンバー

石川健三、和田　宏、中山隆一、鈴木久男（理学研究院）、杉山滋郎（CoSTEP）、松枝大治、内田智子（総合博物館）

松枝大治
（研究部長・教授／鉱物学・鉱床学）

第50回企画展示
「恵迪寮百年記念寄宿舎写真展」

2007年9月22日～10月21日までの一ヶ月間、北大総合博物館知の交流コーナーにおいて「恵迪寮百年記念寄宿舎写真展」が開催されました。北大の歴史ある学生寄宿舎の一つである恵迪寮は2007年で設立百周年を迎え、恵迪寮OBにより「恵迪百年記念祭」が催されましたが、この企画展示はその式典と同じ時期に開催し、当館を訪れるOBの方々にも楽しんでいただけるようにしたものです。

当館には、北海道大学自体の歴史展示は常設されており来館者に好評を博していますが、北大で貴重な青春時代を送り多くの思い出を残した学生に関する展示はありません。そこで学生関連展示常設に向けての第一歩として、彼らが多くの時間を過ごしたであろう「学生寄宿舎」の貴重な写真を展示し、当時を懐かしんでいただいたり、あるいは現在にいたる北大生の生活を想像していただけるよう企画したものです。



恵迪百年記念祭の日でもある展示開催初日は、恵迪寮同窓会ホームページでの当企画展示の紹介もあり、事前の告知が十分できなかったにも関わらず、館内には胸ポケットに名札を付けた多くの恵迪寮OBの方々がみえていました。恵迪寮同窓会・高井崇宏先生、藤田正一先生、池上重康先生、北方資料室児玉陽子さん、北大事務局・施設課の方々、教務課伊澤照勝さんには、資料提供・ご助言など多大なお力添えをいただきました。また展示パネル作成、資料整理、展示作業、広報などにご協力いただいた岡田千咲さん、織田菜摘さん、角井敬知さん、柴田亜梨沙さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

小俣友輝（研究部助教／博物館情報科学）

第51回企画展示
「写真で見るカジカ類の多様性」

10月10日から11月4日まで、1階「知の統合」コーナーにおいて、第51回企画展示「写真で見るカジカ類の多様性」を開催しました。この展示は、本学の学術交流会館において行われた日本魚類学会第40回年会（10月5−8日）と関連した、日本魚類学会との共催によるものです。カジカ類は種数が多い点で北海道を代表する魚類です。水深2,800mの海洋から標高2,000mの山岳河川や湖沼まで生息する、多様な分布域への進出に成功した分類群であり、形態・生活史・繁殖生態・生殖生理などでも多様性に富む、生物学的に極めて興味深い魚類です。これまで本学の研究者による研究成果も多く発表されていますが、それには研究者自身だけでなく、アマチュアやプロのダイバーたちがもたらす情報も大きく貢献してきました。近年、静かなブームとして北日本でもダイビング熱が盛んになってきましたが、その火付け役となった二人の水中写真家、関　勝則さんと佐藤長明さんが撮りためた生態写真を中心に、研究者が撮った貴重な学術的写真と解説を加え、展示を構成しました。企画展開催期間中は多くの市民等が会場を訪れ、熱心に鑑賞していました。会場備え付けの感想ノートには、海底の世界が予想以上に色鮮やかであることに対する驚きの声などが記されていました。



阿部剛史（研究部助教／海藻分類学）

考古学部門の長期滞在研究員の紹介

総合博物館はオホーツク文化に関して、道内5大遺跡（礼文島香深井1遺跡、礼文島元地遺跡、稚内市オンコロマナイ遺跡、枝幸郡枝幸町目梨泊遺跡、網走市モヨロ貝塚遺跡）他の発掘資料を擁しています。これは国内外最大の規模と内容であり、研究者の利用が絶えない情況にあります。これらの資料について2007年度、つぎの3人の研究者が長期滞在して調査をおこないます。

天野哲也
（研究部教授／考古学）

■　柳澤清一·千葉大学文学部教授
（内地研究員2007.4.1−2008.3.31）

オホーツク文化では前期（十和田式段階）と中期（江の浦式段階）の間の不連続性がかねてより指摘されてきました。氏は特に道北の島嶼地域のそれを実査して、この課題を含め編年体系再構築の可能性を探ることを主たる研究の目的としています。とくに、香深井1（A）遺跡と香深井5遺跡の膨大な資料を比較中です。

また道東部に関しては、モヨロ貝塚の新資料の観察、並びに伊茶仁ふ化場第1遺跡の発掘調査を実施して、道東·道北における通説の編年体系の見直し（接触様式→藤本e群）を図ることを目標としています。



（『北海道大学総合博物館ニュース』15号参照）。

中間的成果として下記のものを発表しました。

1）「北方島嶼の先史考古学」『北海道大学博物館ニュース』15

2）「伊茶仁ふ化場第1遺跡と北方編年体系」（北海道考古学会例会発表レジュメ）

3）「ヒグマ祭祀遺構」出土の「トビニタイ土器群Ⅱ」の位置」『物質文化』83

4）「北方編年再考　その（6）」『（千葉大学）人文研究』（投稿中）

■　James William Taylor·ワシントン大学（シアトル）人類学科·博士課程院生（学振·外特（欧米短期）2007.10.17−2008.8.17）



動物が成長するときに、食物とくに水をつうじてその地域の同位体組成が体組織とくに歯のエナメル質に定着することが知られています。したがってヒト動物を問わず、発掘された地域の同位体組成と異なる組成の持ち主はよそ者と言うことになります（「水が合わない」もここから来るかな?）。この原理を利用すると、と、ヒトを含む動物の交流·移動の実態を解明することが期待できます。

オホーツク文化では、サハリンから道北·道東·千島列島への様々な形でのヒトの拡散·移住と後退、家畜としてのブタの何度にもわたる導入、子グマの贈与など多様な移動現象がみとめられ、またキャンプ·母村間の移動や婚入·婚出などもありました。ストロンチウム·鉛·酸素·炭素の安定同位体分析をおこなうことによってJames Taylor氏はそれらの具体的なあり方を明らかにしようとしています。

4月13日に「土曜市民セミナー」で発表します。

■　王　培新［ワン·ペイヒン］·吉林大学文学部教授（総合博物館特任教授2007.12.15−2008.3.29）

オホーツク文化が当時の大陸·靺鞨ー渤海文化の様相を帯びていることはひとつの特徴であり、古くから注目されてきました。実際、例えば礼文島香深井1遺跡でも大陸産の陶器が出土しています。また目梨泊遺跡やモヨロ貝塚遺跡などでは青銅製の帯飾板が得られており、その産地は当時の靺鞨集団の領域·アムール中流域から松花江流域である可能性が高いと考えられています。

この靺鞨集団の地元で長年調査研究をおこなってこられた王培新教授は、その資料とオホーツク文化の比較分析を通じて、当時の手工業製品の流通·分布問題、集団間の政治的関係について研究を進める計画です。

2月9日にシンポジウムで成果を報告する予定です。



特任教授紹介

総合博物館では、平成19年12月1日から20年2月29日までの3ヶ月間、特任教授としてロシア、ウラジオストック・生物学土壌学研究所上席研究員のValentin Yakubov博士を招聘しました。博士の専攻は植物分類地理学で、北東アジア各地で野外調査の実績があります。特にカムチャツカ半島の植物について詳しく、一般向け著作として“Plants of Kamchatka -Field Guide”（2007）を最近出版したばかりです。



平成20年1月13日には公開シンポジウム「北東アジアにおける被子植物の多様性」を開催し、「極東ロシアと日本におけるキジムシロ属の分類に関する研究」の演題でその成果をご講演頂きました。博士にとっては初めての訪日ですが、多くの日本人研究者との交流・意見交換がなされました。

氏名:Valentin Vasilievitch Yakubov
（ヴァレンチン・ヴァシリエヴィッチ・ヤクボフ）
専門分野:植物分類地理学
略歴:1950年生まれ、極東州立大学卒業、ウラジオストック生物学・土壌学研究所にてPh. D.取得。現在同研究所上席研究員。

高橋英樹
（研究部教授／植物体系学）

紀伊國屋書店札幌本店にて「北海道大学の昆虫」標本展を開催

総合博物館では平成19年7月16日（月）から8月19日（日）まで、札幌駅前の紀伊國屋書店札幌本店において、「北海道大学の昆虫」標本の展示を行いました。これは、期間中開催された大学出版部協会主催によるブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」に際し、同フェアの地区担当校である北海道大学出版会と紀伊國屋書店札幌本店からの呼びかけに協力したものです。

大学出版部協会は、全国31校の国公私立大学に設置された大学出版部が加盟する全国組織です。今回のブックフェアは、これら加盟大学出版部が発行する自然史系書籍を通じて、自然史科学（ナチュラルヒストリー）を広く普及することを目的に開催されました。また、会場となった紀伊國屋書店札幌本店は、サイエンス・カフェの会場としても用いられています。

展示された「北海道大学の昆虫」は、北大の昆虫相を明らかにするために1年を通じて採集されたコレクションの中から、夏期に採集された標本を選んだもので、元博物館研究生の廣永輝彦氏・農学研究科大学院生の神戸崇氏により研究されました。北都札幌の中心部に位置する北大の構内に、いかに多くの昆虫が生息しているかがわかります。



小さなコーナーですが、標本箱に並べられた昆虫標本に、来店した多くの人たちが目を留め、自然史科学と自然史系書籍の普及に少なからぬ役割を果たしました。

持田　誠
（研究支援推進員／植物体系学）

北海道大学交響楽団 チェンバロプロジェクト演奏会　vol. 1

2007年8月6日（月）、北大で行われたオープンキャンパスと時期を同じくして、チェンバロアカデミーによる北大交響楽団チェンバロプロジェクト演奏会の第一弾が、総合博物館知の交流コーナーにおいて開催されました。当企画は、2004年に台風で倒れた北大のシンボル・ポプラ並木のポプラから作られ、現在総合博物館に展示されているポプラチェンバロを楽器として活かし、学内・学外問わず多くの人に音楽の楽しさを味わっていただくことはもとより、古典楽器を軸とした歴史学、古典音楽学、音楽と数学との関わりなど多くの可能性を追求するプロジェクトの一環で、現代楽器と古典楽器（一般に楽器のチューニングが異なる）のコラボレーションによる演奏会となっています。北大交響楽団としても古典楽器とのコラボは初めての試みでした。総合博物館では、その目的の一つに「展示公開、見学会、講演会、演奏会等を通じて地域社会の人々、小中学生、高校生等の学習に貢献するとともに文化に触れる機会を提供する」と謳っており、チェンバロを使った市民との交流イベントは、音楽を通じて広く「文化」を地域社会と共有する「ミュージック in ミュージアム」に続く有意義な活動であります。

当日は会場から溢れてしまうほどの一般市民らが集まり、プロジェクトリーダー・藤井美雪さんのチェンバロソロ・クラヴサン曲集第一巻組曲五番より「パッサカリアハ長調」（ルイ・クープラン）、および交響楽団チェンバロプロジェクトによるブランデンブルグ協奏曲第四番ト長調（ヨハン・セバスチャン・バッハ）を楽しんでいました。アンコールにはオンブラ・マイ・フ（ヘンデル）も披露され、一時間強のステージに聴衆は魅了されていました。

北大交響楽団顧問の奥　聡先生、藤井美雪さん、ヴァイオリン独奏柳秀紀さん、フルートの藤澤望さん・駒井由紀さん、交響楽団チェンバロプロジェクトメンバーの皆さま、また広報でご尽力いただいた神村章子さん・荒瀬美由紀さん、設営などお手伝いいただいたチェンバロアカデミーの方々にはこの場を借りて御礼申し上げます。

なお、当日のプログラムノートやプログラムの詳細は総合博物館のホームページから閲覧可能で、随時更新中です。トップ→チェンバロアカデミー→eventをご参照ください。

小俣友輝
（研究部助教／博物館情報科学）

ヒストリカル·カフェを開催

2007年夏、当館で「ヒストリカル·カフェ」というワークショップが3回シリーズで開催されました。カフェを企画·運営したのは本学理学院「博物館コミュニケーション特論」ゼミの大学院生達、ゼミを指導したのは当館の天野哲也教授と筆者でした。ゼミでは社会における大学博物館のあり方について考察し、学生達は当館の課題を見出し、それを解決するためのグループ·ワークに取り組みました。カフェの取り組みもその一つ。総合大学の総合博物館でありながら人文科学の視点が弱いことを課題と捉えた学生達は、北海道の歴史をテーマにしたワークショップを発案しました。ワークショップをサイエンス·カフェの歴史版と位置付けて「ヒストリカル·カフェ」と命名したのも彼らです。ゼミでは、大学博物館でこのカフェを実施する意義を他グループ学生と共に議論し、ゼミの時間枠を超えてリハーサルを重ねました。

第1回「化石としての時刻表」では、柾谷洋平さんが時刻表の数字の羅列から北海道の社会史の一側面を描き出し、更に時刻表がモノとして残ることの意味について語りました。第2回「デスモスチルス化石の歴史」では、田中嘉寛さんが当館所蔵のデスモスチルスの化石が発掘されて調査研究を経て展示されるという、一連の流れを展示室や化石クリーニング室等で解説しました。第3回「北海道大学の音楽史」では、玉田純一さんが自身も所属していた北大交響楽団の歴史を紐解き、団員による弦楽四重奏を交えて、本学と西洋音楽との関わりについて語りました。参加者と毎回異なる形式でコミュニケーションするプログラムが練られました。全回通して話者をサポートし、参加者とのコミュニケーションを促進したのはカフェの運営を統括した櫻井祐太さん、PRと記録を担ったのは日比野泰隆さんでした。全員、理学院自然史科学専攻の修士1年生です。話者も運営スタッフも議論とリハーサルを重ねてパフォーマンスを向上させ、カフェは参加者の方々から大変好評をいただきました。



ヒストリカル·カフェ第2回「デスモスチルス化石の歴史」の様子

学生達はゼミでの議論やグループワーク、そしてカフェ参加者との交流を通して学び合い、カフェを企画·運営した達成感を感じたとのこと。但し、カフェはイヴェントではなく、当館の教育プログラムの一つです。彼らはこの実践を記録し評価する宿題に取り組んでおり、今年度中に報告書をまとめる予定です。当館は教育研究機関として、今後も大学博物館のリソースを活かした学生教育を展開したいと考えています。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

福井市自然史博物館「樺太·千島」展に出展

総合博物館企画展示室において開催された「樺太展」（平成18年度）と「千島展」（平成19年度）の展示内容が、福井県にある福井市自然史博物館に巡回され、第64回特別展「樺太·千島―北の秘境に挑む―」として平成19年7月14日から9月24日まで一般公開されました。

総合博物館は、監修および協力として展示に関わりました。福井市自然史博物館は、幕末に越前大野藩（現福井県大野市）が樺太開拓に赴いていたことを紹介し、北海道大学や自然史研究者のフロンティア精神と結びつけ展示を完成させました。展示の関連行事としてミュージアムトークが4回開催され、筆者も一般講演を行いました。3,258人の入館者数があったものの、北海道大学に特化した展示（北海道大学の研究史など）に関心を持った人は、比較的少なかったようです。

また年配の来館者が多く、子供向けとしては展示内容が少し難しいのではないかという意見もあり、他の博物館への巡回展における課題は残ります。福井市自然史博物館は、独自の展示物を取り入れ福井に関連した展示内容にアレンジし、これらの問題について対処しました。来館者の中で「福井と樺太など北方が関係していたことを改めて知ることができ、貴重な資料を間近で見られてよかった」との声が多く、巡回展示の重要性も強く感じられ意義のあるものであったとも考えられます。また、福井市自然史博物館の入り口で、総合博物館グッズ、北海道大学グッズ、北大出版会の書籍が販売されました。



小林快次
（研究部助教／古脊椎動物学）

藤田正一 大学院獣医学研究科教授（前総合博物館長）に北海道新聞文化賞

前総合博物館長の藤田正一教授に、北海道新聞社より北海道新聞文化賞が授与されました。この賞は、毎年、社会·学術·経済の各分野で北海道の発展に大きな役割を果たした人々や団体に贈られる賞であり、1947年から今年で61回目となります。環境汚染物質による野生動物の汚染と生態系への影響評価に関する研究や、総合博物館の拡充、遠友夜学校サポートなどの功績が高く評価されたものです。

（博物館事務）

ミュージアムショップの移転

平成17年11月に博物館2階にオープンして以来ご好評をいただいています『ミュージアムショップ』ですが、このたび場所を1階正面入り口右側に移転して新規オープンいたしました。店内は今までより少し大きくなり、よりご利用しやすくなりました。博物館を楽しんだ後にぜひお立ち寄りください。北大オリジナルグッズの他、ミュージアムショップならではのオリジナルグッズを多数取り揃えております。また、ショップスタッフは全員が現役北大生です。意欲ある学生が生き生きと働いています。多くの皆様のご利用をお待ちしております。



1階正面玄関から入ってすぐ右側



店内の様子

曽根　聡
（ミュージアムショップ店長）

平成19年4月から平成19年9月までにおこなわれたセミナー等

第166回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「新任館長挨拶」
馬渡　駿介（総合博物館　館長）
日時：4月14日（土）13:30−15:00（参加者約80名）

第167回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「生物の分布域はどのように決まるのだろうか −ショウジョウバエの場合−」
木村　正人（大学院地球環境科学研究院　教授）
日時：4月28日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第168回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「神々の庭に遊ぶハエ」
諏訪　正明（北海道大学　名誉教授／総合博物館　資料部研究員）
日時：5月12日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第169回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「サンゴ礁と地球環境変動」
渡邊　剛（大学院理学研究院　講師）
日時：5月26日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第170回　レイチェル・カーソン生誕100年記念公演
「レイチェル後の環境問題」
藤田　正一（大学院獣医学研究科　教授）
日時：5月27日（日）午後（参加者約100名）

第171回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「光のエネルギーでできること（2）」
オラフ　カートハウス（千歳科学技術大学　教授）
日時：6月9日（土）13:30−15:00

第172回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「寄生性だけじゃない −線虫の多様性：人知れず生きる自活性の線虫−」
鬼頭　研二（札幌医科大学医学部　講師）
日時：6月23日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第173回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「博物館は生き残れるか? −博物館切捨ての時代を考える−」
石森　秀三（観光学高等研究センター　センター長）
日時：7月14日（土）13:30−15:00（参加者約80名）

第174回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「深海堆積物に記録された急激な気候変化」
阿波根　直一（大学院理学研究院　准教授）
日時：7月28日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第175回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「先住民族と大学…アイヌ・先住民研究センターがめざすもの」
常本　照樹（大学院法学研究科　教授）
日時：8月11日（土）13:30−15:00（参加者約90名）

第176回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「褐藻カヤモノリ科の系統と分類」
小亀　一弘（大学院理学研究院　准教授）
日時：8月25日（土）13:30−15:00（参加者約50名）

第177回　北大総合博物館土曜市民セミナー
「ポプラの思い出」
藤田　正一（大学院獣医学研究科　教授）
日時：9月8日（土）13:30−15:00（参加者約100名）

第178回　21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館市民セミナー
「人魚が海で牛になった日 −北太平洋カイギュウ類の進化におけるサッポロカイギュウの重要性−」
古沢　仁（札幌市博物館活動センター　学芸員）
日時：9月22日（土）13:30−15:00（参加者約70名）

第179回　「湯川秀樹＆朝永振一郎生誕百年記念展」市民セミナー
「湯川と朝永が切り開いた「中間子論」と「繰り込み理論」」
石川　健三（大学院理学研究院　教授）
日時：9月29日（土）13:30−15:00（参加者約60名）

第20回　総合博物館国際（公開）シンポジウム
「Gondwana Research − Tectonics, Metamorphism, Mineralogy, and Fluid Activity」
日時：5月10日（木）13:00−18:00（参加者約20名）

平成19年4月から平成19年9月までにおこなわれたCOEパラタクソノミスト講座

6月30日（土）〜7月1日（日）
「スゲ植物パラタクソノミスト講座（中級）」勝山輝男・高橋英樹（参加者12名）

7月31日（火）〜8月1日（水）
「昆虫パラタクソノミスト講座Jr. in旭川（初級）」「ファーブルにまなぶ」展関連企画　共催：旭川市科学館サイパル　大原昌宏・南尚貴・澤田義弘　（参加者27名（保護者11名含））

8月2日（木）〜3日（金）
「魚類パラタクソノミスト講座（初級）」共催：北大水産学部　仲谷一宏・矢部衛・今村 央　（参加者7名）

8月7日（火）〜8日（水）
「昆虫パラタクソノミスト講座Jr. in徳島（初級）」共催：徳島県立博物館　大原賢二・山田量崇・大原昌宏・澤田義弘　（参加者13名（保護者4名含））

8月11日（土）
「シダ植物パラタクソノミスト講座（中級）」　佐藤利幸・高橋英樹　（参加者18名）

8月18日（土）
「植物パラタクソノミスト講座（初心者・初級）」　高橋英樹・加藤ゆき恵　（参加者11名）

8月18日（土）〜19日（日）
「昆虫パラタクソノミスト講座Jr. in野幌（初級）」「ファーブルにまなぶ」展関連企画　共催：北海道開拓記念館　大原昌宏・堀　繁久・澤田義弘　（参加者39名（保護者13名含））

9月1日（土）〜2日（日）
「岩石・鉱物パラタクソノミスト講座（初級）」　松枝大治・在田一則・三浦裕行　（参加者16名）

9月23日（日）〜24日（月）
パラタクソノミスト養成講座特別企画「岩石・鉱物　野外採集会」松枝大治（参加者29名）

平成19年4月から平成19年10月までの主な出来事

4月 3日　あすの山口を作る県民会議　視察（100名）
4月29日　ハムディ・アブダーラ客員研究員（エジプト核物質研究機構教授）来館。7月29日まで滞在。
4月　学校等見学　高等学校（3校73名）、大学（1校37名）、その他（2団体41名）
5月19日　第45回企画展示「科学者のフィールドスケッチ展 ―坂本直行を源流として」（6月24日まで）
5月19日　新渡戸稲造・万里子夫人メモリアルデイ実行委員会視察（100名）
5月29日　香港理工大学応用社会科学系一行　見学（15名）
5月　学校等見学 小学校（1校5名）、中学校（10校378名）、高等学校（1校8名）、大学（1校60名）、その他（2団体123名）
6月 8日　北海道大学ボランティア相談室　見学（20名）
6月22日　韓国・昌原大学人文大学教員一行　見学（32名）
6月23日　北海道大学キャンパスビジットプロジェクト　見学（70名）
6月30日　第46回企画展示『昆虫記』刊行100年記念 日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展 オープニングレクチャーの開催
6月　学校等見学 小学校（10校142名）、中学校（6校323名）、高等学校（10校1,567名）、大学（2校38名）その他（2団体28名）
7月 1日　第46回企画展示『昆虫記』刊行100年記念 日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展、第47回企画展示「北大の昆虫学」（9月17日まで）
7月 1日　第48回企画展示「レイチェル・カーソン生誕100年記念パネル展」（9月17日まで）
7月 5日　文部科学省磯谷学術研究助成課長他　視察（3名）
7月20日　カルチャーナイト2007開催（約200名）
7月16日　「北海道大学の昆虫」標本展（8月19日まで）
7月26日　フロンティア基金関係者　見学（23名）
7月27日　国立教育政策研究所　北海道研修参加者　見学（21名）
7月　学校等見学 小学校（2校18名）、中学校（5校90名）、高等学校（2校68名）、大学（5校153名）、その他（5団体161名）
8月 4日　全国大学生協連　見学（25名）
8月 5日　北海道大学オープンキャンパス（11名）
8月24日　中国吉林大学学長一行　視察（5名）
8月25日　北海道文化財保護協会　見学（30名）
8月30日　大阪大学施設部長一行　視察（5名）
8月　学校等見学 小学校（4校47名）、中学校（3校9名）、高等学校（2校381名）、大学（2校63名）、その他（5団体184名）
9月21日　第49回企画展示「湯川秀樹＆朝永振一郎―生誕百年記念展 ～ノーベル賞への道のり～」（11月4日まで）
9月15日　滝川郷土研究会　見学（38名）
9月22日　第50回企画展示「恵迪寮百年記念寄宿舎写真展」（10月21日まで）
9月29日　（財）大阪科学技術センター　見学（6名）
9月　学校等見学 小学校（15校222名）、中学校（2校74名）、高等学校（5校699名）、その他（11団体366名）

入館者数（平成19年4月～平成19年9月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
4月	3,806	7	2	「北大千島研究の系譜」展
5月	5,813	17	5	「科学者のフィールドスケッチ展」
6月	6,960	33	7	同　上
7月	12,827	22	6	「ファーブルにまなぶ」展 「北大の昆虫学」展 「レイチェル・カーソン」展
8月	18,837	20	4	同　上
9月	13,698	36	5	同　上 「湯川&朝永」展 「恵迪寮百年記念」展

お知らせ

●持田誠さん、庄子香織さんのお二人が、研究支援推進員として平成19年5月に採用されました。

◆

●第52回企画展示「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」展が、平成19年12月18日から平成20年2月17日までの予定で開催されています。
●第53回企画展示「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」展が、平成20年1月22日から2月24日までの予定で開催されています。
●第54回企画展示「黒曜岩展示」が、平成20年1月15日から3月31日までの予定で開催されています。

寄附のお礼

総合博物館支援募金へのご寄附について心から感謝申し上げます。ご寄附は、当館の企画展示等に有効に使用させていただきます。このご厚志に対しまして職員一同感謝申し上げるとともに、ご寄附をいただいた方のご芳名（敬称略）をここにご報告し、掲載させていただきます。

北海道新聞社、プロバンス アルプ コートダジュール地方観光局

お　礼

以下の方々に、学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます（平成19年4月～平成19年9月）。

植物標本:甲山幸子、高橋友美、佃奈央子、土屋妙子。
昆虫標本:青山慎一、梅田邦子、大矢朗子、賀勢朗子、喜多尾利枝子、櫛引靖子、久万田敏夫、永山 修、宮本昌子、山本ひとみ。
化　石:石橋七朗、江越春、小泉有希、小林暁子、中野 系、納富昌弘、萩原 茜。
地　学:安齊沙耶、荻田雄輔、生越昭裕、堺俊樹、寺西辰郎、鳥本准司、納富昌弘、福地伸章、三浦貴生、道政広一、安田 正、山崎敏晴、渡辺隆司。
考古学系:木村麻衣子、比留間俊文。
展示解説:相原大介、在田一則、安齊沙耶、石田祐也、石橋七朗、稲荷尚記、越前谷宏紀、甲山幸子、齊木　梢、齋藤美智子、鈴木理紗、高橋友美、舘　亜古、田中康平、田中嘉寛、寺西辰郎、中野　系、永山　修、成田敦史、沼田勇美、林　昭次、星野フサ、村井容子、望月 直、山本佳奈。
北大の歴史:寺西辰郎。
平成遠友夜学校:秋葉雄太、安藤亮太、石本真之、河野歩実、見山智宣、横田麦穂。
情　報:日比野泰隆、村上英樹。
カルチャーナイト:安部健介、片岡珠理、甲山幸子、鈴木理紗、高橋友美、寺西辰郎、福原和紀、札幌市市民天文同好会、北大ジャズ研究会、北大天文同好会。
チェンバロアカデミー:明楽みゆき、安達真由美、荒瀬美由紀、大塚直彦、大西裕之、岡田千咲、奥　聡、織田菜摘、神村章子、岸浪典子、草野美穂、工藤羊子、小西智子、小山千佳、佐藤浩輔、下川部雅英、下澤美緒、鈴木せいら、新妻美紀、酘島頼子、藤井健吉、藤井美雪、水永牧子、棟朝雅晴、茂木公美子、渡邊温子、北大交響楽団チェンバロプロジェクトメンバー。
ファーブルにまなぶ展（平成19年7月1日～9月17日）:在田一則、石橋七朗、板垣町子、稲荷尚記、荻田雄輔、賀勢朗子、喜多尾利枝子、櫛引靖子、甲山幸子、齋藤美智子、嶋野月江、清水良平、高橋友美、舘　亜古、寺西辰郎、中野　系、永山 修、鳴海典子、廣永輝彦、星野フサ、村井容子、村上龍子、持田 誠、山本ひとみ。
レイチェル・カーソン展（平成19年7月1日～9月17日）:池田光良、石川満寿夫、石田和雄、石田多香子、岡部賢二、尾崎武治、片岡　真、北越正生、北山貴理、切明澄江、小島尚三、児玉諭、近藤　務、齋藤美智子、関根達夫、田中敏夫、沼田勇美、濱田智子、藤島京子、村井容子、米道 博。
湯川秀樹・朝永振一郎展（平成19年9月21日～11月4日）:石川健三、塩谷まき子、鈴木久男、田中　一、寺西辰郎、中山隆一、安田　正、山崎敏晴、和田　宏、中谷宇吉郎 雪の科学館。
恵迪寮百年記念展（平成19年9月22日～10月21日）:岡田千咲、織田菜摘、角井敬知、柴田亜梨沙。
図書室整備作業協力者:梅木佳代、北越美樹子、田子紗緒里、名知愛美、宗像麻衣子。
（敬称略）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース　第16号
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース
編集：松枝大治・星野祐子
発行日：2008年（平成20年）2月
発行者：馬渡駿介
発行所：北海道大学総合博物館
住所：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷：株式会社アイワード